
ゴシック・ロジック

もみもみじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴシック・ロジック

【Nコード】

N7448Y

【作者名】

もみもみじ

【あらすじ】

剣を越えゆく者、剣越者。少年、羽馬。結城は、そんな肩書きを
持っていた。

魔を行使する探偵、魔術探偵。少女、ユイヤ・オルコットはそう名
乗っていた。

魔すらを切り裂く刀『白朱雀』を持つ少年と、罪による罰を受けた
一人の少女が出会うとき、物語は狂い始める。

第一話 始曲と剣越のプロローグ（前書き）

この作品は、私もみもみじのブログである、『もみじ300%』（名前はよく変わる）にて書かれた小説である。

今回は、復帰を含めてなるうちに投稿させてもらいました。未だに未完結ですが、どうぞよろしくお願いします

もみもみじのブログ

<http://ameblo.jp/inm01-nagisa/>

第一話 始曲と剣越のプロローグ

東京の春。夜だと言うのに星が見えない。少し肌寒いが、それは春に入ったばかりであろう。都市に入ったからかもしれないが。

俺の知る限り、この季節を実家はとても花粉が強く、両親が苦しうにくしゃみをしていた印象がある。ただ、この東京ではそういうことはなさそうだ。それゆえに、少し戸惑いを覚える。

「東京に出るなんて、あの時は考えてすらいなかったな」

俺は好きでこの町に来たわけではない。できれば、実家にずっといたかった。

でも、俺には使命がある。

「姉さん……」

行方不明となった姉さんを探すこと。そして、連れ帰ることである。

ただの姉貴ならここまでのことはしないだろう。でも、彼女は普通ではない。否、この俺も普通ではない。

剣越者。剣を越える者と書いてケンエツシャと呼ぶ。この肩書きを持つ者は、一言で言うなら世界一の剣士だ。いや、世界一は語弊かもしれない。現在我々が観測できる剣士の中で一番強いものを指す、と言った方が正しい。

俺の姉さんはその剣越者の一位である。候補者とも言えるのだが、まあ、現在の剣越者ということだ。

しかし、姉さんは5ヶ月前に家を出たばかりで連絡がなく、流石に危険を感じたのか、父が俺に連れ戻すように言った。

そして、俺はこの東京の地に立っている。父曰く、とある助っ人を用意しているそうだ。

「ここか……」

俺は父から手渡された住所が書かれたメモを現在地と照らし合わせながら、そうつぶやいた。

そこは一言で言うなら事務所。加えるなら探偵事務所というべきか。とにかく、そういう雰囲気のところだった。

「確かに探偵なら姉さんを探すには楽になるかもな」

素人より、そういう作業が得意そうな人間のほうがいい。父はそれを見越して言ったのだらう。

俺は恐る恐る事務所の扉を開ける。

「ご、ごめん、くださーい……」

そこにあつたのは黒を基調とした机、ソファなどと大量の本棚。

そして、探偵が座つていそうなところにあるゴシッククロリータという種類の人形。

「……留守か」

「そうとは限らないんだよ」

静かな室内にそんなソプラノ質の音が響いた。

俺は身震いし、事務所から出ようとした。

が

「なっ!？」

扉が開かない。まるで扉自身が壁となったように動かないのだ。

「魔力を行使したら、そういうこともできる」

再びソプラノの音が響く。冷たく、だが少し楽しんでいるような声だ。

俺は扉を開けることを諦め、とりあえずこの事務所の主の名前を呼ぶことにした。

「ユイヤ・オルコット……。出てこい!」

静かな部屋で聞こえるのは大きな俺の声のみ。しかし、その声が反響するかしないかのうちに、

「君の目の前にいる」

と、返答してきた。しかも、例によってソプラノの声で。

俺は戸惑う。父からはユイヤ・オルコットは男と聞かされていた

からだ。

俺が動かないのを見て、ソプラノの声はため息をついた。

「しょうがない。動いてあげる」

短く、そしてなんだか残念そうな声を出しながら、ソプラノの声は止んだ。

だが、それと同時に目の前にいたゴシッククロリータの人形 否、人間が動き出した。

そして、俺の目の前に立って可愛らしく一回転し、

「ボクの名はユイヤ・オルコット。魔力を行使する魔術探偵さ」と、ソプラノの声をあげながら微笑んだ。

「魔術探偵？」

それは俺が聞いたことがない単語であった。否、聞くどころか存在するのか疑ってしまう単語である。俗に言う、厨二病という単語だとも考えた。

しかし、それよりも俺にとっては父から聞いた情報が違うことが衝撃的だった。

「俺が知っているユイヤ・オルコットは、男であり、普通の探偵である」

「その情報は誰に、いつ、聞かされた？」

この自称ユイヤ・オルコットは、その可愛らしい声でそう問いてきた。

「俺の父親……羽馬 祐平からの情報だ。一週間前から聞かされた」

「祐平……。剣越者のかい？」

俺の父は元剣越者である。詳しくは剣越者の証を姉さんに明け渡した人間である。更に追加するなら、元一位である。

「ああ。元、だがな」

「彼に最後に情報を与えたのはおよそ3年前だから、この情報は聞

かされてないね。まあ、流れないようにしたただけなんだけどね」

話が見えてこない。何を言っている？ 3年前？

解らん。実に解らん。

「まあいいや。とりあえず君の話を」

その瞬間、俺の後ろにあった扉が破裂音に等しい爆音と共に、吹っ飛んできた。詳しくは、ような気がした。なぜなら、その扉は俺の後頭部に思いつき当たり、意識が一瞬朦朧としたからである。

「つか、あの扉って開かないんじゃないかなかったっけ？

「あら？ 内側から魔術をかけたのになー」
なるほど。理解はできた。

俺は奇跡的に角に当たらなかった扉にありがた半分、憎しみ半分で一瞥しながらその扉があった部分を睨んだ。

まだ、頭が痛いけどな。

「ユイヤア・オルコットオの、事務所はここかあ？」

低くて、尚且つドスが効いた声が静かな部屋中に響く。五月蠅い。「うわあー。ダルいの来たよ」

その可愛い声で棒読みをしたゴシツクロリータ 通称、ゴスロリ少女は不敵に笑った。自信があるというか、余裕がある感じだ。

「ああ？ 女……？」

低い声の主は、複雑そうな感じになっている。よく見たら、その姿は筋肉質なスキンヘッドの男だった。

「お前って……なんかしたのか？」

明らかにおかしい。喧嘩でも売ったのかもしれない。でも、その喧嘩を買うのは如何なものか。まあ、確かに言い方はムカつくけどさ。

「こいつは一言で言うなら、邪魔者だよ。いるだけ無駄」

こ、攻撃的だな。火に油を注ぐなよ。

「チツ。魔術師ユイヤ・オルコットは男だと聞いてたが……。とんだ情報違いだな」

情報が違う？ それは俺と同じ情報？

「間違つてはいない。魔術師ユイヤ・オルコットは、確かに男だった」

少女が淡々と知つたように言葉を並べる。

俺とスキンヘッドはそれを静かに聞く。

「だが、一年前にユイヤ・オルコットは禁術を犯し、一つの罪を与えられた」

そう言つて、少女はなんとも悲しいそうな表情になりながら告げる。

「それがこの姿。強き肉体は弱き女の姿になり、魔術のみしか使えない存在となつて現在に至る。実に悲しいが、倫理に適っているから何も言えないけどね」

そう言い終えると、少女は大きくため息をつく。

「どう？ もう戦う気はなくなつた？ じゃあ、帰」

「ということは、今は抵抗できねえ、ということだよな？」

変な捉え方した！ こいつ、エロステイックな捉え方した！

「つかこいつHENTAIだ！！」

「正真正銘の変態だね、君は。嫌いだよ、君みたいなのは正論である。」

「変態で何が悪い！」

逆ギレである。

なんだこのコントは？

「ボクは元を辿れば男なんだよ？ いいのかい？」

「今が女なら、問題なしだ！！」

駄目だ。こいつはヤバいな。色んな意味で。アツー的な意味で。つて、おい対話が戦闘する前の対話じゃなくなってるぞ。

「ガーーーーー！ お前ら、真面目に戦う対話をしろ！！」

あつ、声が出てしまった。

「ああ？ やんのか？ てめえみたいなやつは引つ込んでな！」

少しムカツとするな。確かに、客観的に見れば俺の容姿は白いポ

ロシャツとジーパンを来て、背中に長細い黒い袋を肩にかけている、少しやんちゃな感じを思わせる（らしい）ただの少年だからな。

でもヤバイな。これは、俺も戦わないといけない感じだぞ。

まあ、いいか。か弱い女の子を守るぐらいならできる。

「じゃあ、やらしてもらうか。ただ、」

俺は、大声を出した俺を丸い目で見つめる少女を見る。

「ユイヤ・オルコット。こいつを追い払ったら、俺の依頼に条件無しに飲むこと。いいか？」

金を請求されたら堪らんからな。

「うん、いいよ。でも、どうやって戦うのだい？」

「俺の父は剣越者である。そして、俺も姉さんほどではないが剣越者だ。故に、剣で戦わせてもらう」

俺は背中に背負っておいた一つの袋を取り出す。その中の物は俺の背丈の2/3ぐらいの物だ。言うまでもない。俺の剣が入っている。

「剣越者、第八位、羽馬 結城。いざ参る！！」

俺はその声と共に、剣を抜き、スキンヘッドへ立ち向かった。

俺が抜いた剣は刀の形をしており、白き刃と柄が目立つ姿になっている。名前は『白朱雀』。俺が剣越者になった時に渡された相棒とも言える存在だ。ついでにネーミングは、父である。

俺はその剣を構え

「実に下手な構えだね」

お、俺はその剣を構えて

「まるで素人だ。倫理に適っていない」

……そう、ゴスロリ少女が言うように、俺の構えはおよそ素人、いやそれよりも劣るほど不可思議な構えである。その型は存在しない。

剣越者には独自の構えが存在する。霞の構えを代表に、様々な構えが存在する。そして第八位である自分の構えは、一言で言うなら無。加えるのなら何も無い。ただ純粹に自由な構え。ゆえに、素人ゆえに、おかしい。

自分で自分を傷つけていく気がする……。もうやめよう。

とりあえず、俺はその剣を素人に等しい構えで攻める。相手の懐まで近づき、まずは横なぎ払い。

「なめんなよお!!」

それを右腕で受け止められる。よく見ると鉄製トンファが握られている。

「なら!」

受け止められた剣を軸に右足で相手の腹を蹴る。威力は低いが、それでも相手から離れることに成功する。

「次!」

再び迫り、縦なぎ、斜めなぎ払い。そこからアッパーの如く下からのなぎ払い。攻撃は全てかわされるか、受け止められる。

「フンッ。一発は重いが、当たらねえぜ!」

「チッ」

思わず舌打ちをしてしまう。

すると、後ろから少女が余裕を含む笑みを浮かべながらこう言う。協力してあげようか?」

小馬鹿にされている気がした。少しムツとした。

「大丈夫だ。切札は残しておく主義なんだ」

第一、こんなやつに幾つもある切札を最初から見せるなんて楽しくないだろ。

「おうらあ!!」

相手のトンファに思い切り刃を当てて、その衝撃で一度間合いを空ける。

スキンヘッドはトンファを再び構える。手順は整った。

「やるか……」

俺は素人に近い構えをとき、普通に剣を横に持ちながら構える。

「普通にできるんだ」

後ろのゴスロリになんか言われたがとりあえずツッコまないでおこう。

スキンヘッドは警戒するが、それは無駄に終わる。速度が違いすぎるのだ。

「羽馬流、初中段構え、『雪』。そこからの派生奥義!!」

俺はその構えのまま相手の懐へ踏み込む。

スキンヘッドは何とか止めようとトンファを構えるが遅い。

「翼越つ!!」

それはまるで翼を斬るかのごとく。そして、翼を折るかのごとく、その技は炸裂する。この技を簡単に言うなら横なぎ払い。だが、徹底的に違うのはその速度。元々変な構えゆえに速度が遅い無の型を利用していたが、あくまであれは枷であり、この構え『雪』に変えることで速度が上がる。

人は誰だつて得意の型が存在する。俺は無の型を得意とするが、それでも『雪』の型のほうが強い。ゆえに俺は剣越者の中では異端者扱いをされているらしい。異名は『二重型の八位』。自分の誇りと言つていい異名だ。

「がつ……」

スキンヘッドはトンファを十分に構えることができずに、腹を横一線に斬られた。痛かっただろう。苦しいだろう。だが、それまでだ。死にはしない。

「俺の刀、白朱雀は人を殺めることはできない。詳しくは、血を流さずに人を殺めることができる」

俺は倒れた敵を見ながら、矛盾した説明をする。実際、俺はこの刀の原理はよく解っていない。結果論を言つと、斬られた人間は肉体的に死にはしないが、精神的には死ぬ。手加減すると戦闘意識が

なくなったりする。今回も手加減してやった方だ。

俺は刀を袋にしまい、ゴスロリ少女のほうを見る。スキンヘッドは意識を失ったので、大丈夫だろう。

ゴスロリ少女は、興味深げに俺を見る。

「精神魔術論……って知っているかい？」

唐突にそう聞いてくる。俺は知らない、短く言う。

「精神は魔力でできているという説だ。勿論、“表”にはこの説は通じない。だから、ここから言うことは“裏”のことだが、魔術と
いうのは存在する」

それはなんとなく知っていた。半信半疑だったが、扉の件で確信した。

「人間には一人一人魔力を持っている。それが精神という理論だ。勿論、これは科学的にも魔術的にも解明されていないけどね」

ただ

と、少女は繋げる。

「君が持つその刀、白朱雀はその原理を加えるのなら証明できる。その刀は、魔力を斬る剣だ」

……俺はそう言われても何も返答できなかった。理解はした。だが、それがどうした。特に何かあるわけではない。

「興味深い。倫理に縛られず、尚且つ自由な型、無を切札にせず敵を倒す君の技術と、その考え。そして、その刀。ゆえに、君を助手に迎えたいわけだが」

「いや、依頼者なんだが」

ていうか、約束を忘れられている気がする。

「や・く・そ・く!!」

「ん？」

ああ……忘れられているな、完璧に。

「ああ、あれか。うん、いいよ。でも、条件付き」

条件付き？

「依頼を聞いてあげるから、ボクに協力してくれないか？」

「助手か？」

「うん。倫理には適っていると思う」

「どうやら順序が違うようだが、少なくとも協力はしてくれる感じだ。」

探偵の助手か……。ホームズでいうワトソンの存在になれ、と。

……無理な気がする。だが、まあ、悪くはない。時間をかけても支障はないだろう。

「その条件、飲ましてもらおう」

そして目の前にいるゴスロリ少女は、満面の笑みを浮かべながら頷いた。

「自己紹介しとくよ。ボクは魔術探偵のユイヤ・オルコット。よろしく」

「俺は剣越者の第八位であり、魔術探偵ユイヤの助手の羽馬 結城だ。よろしく」

そして、俺達は共に握手をした。

こうして、俺は自分の運命を狂わせ始めたのだった。

第一話 始曲と剣越のプロローグ（後書き）

運命というものはあるかどうか判らない空想の言葉です。だから今回はその空想の言葉があると仮定して話します。

人には様々な道があります。

それを選択して生きるのが運命です。

また、人生と言ってもいいでしょう。

人は選択者です。

決めるのは己です。他の人ではありません。

結城も、選択をしました。

しかし、彼の選択は果たして彼自身が決めたことでしょうか？

そう考えると、人間の選択は難しいと思いませんか？

第二話 死神と魔術のストラテジー

さて、早速依頼を、という感じでいた、俺こと羽馬 結城であったのだが。

「なんでお茶作業をしないといけないんだよ！」

「助手といえば、お茶入れでしょ。倫理には適っている。あつ、あと、紅茶ね」

現在、依頼を頼んでから軽く7時間は経つ。状況を言うなら、永遠とお茶を入れているだけである。お茶をいれ、それを飲まれ、そして再びそれをいれる。ただ、それだけのサイクル。まさにティーサイクルだ。

「何時、依頼に手を出してくれるんだよ」

「まだ、かな。一応情報網で探っているけど」

このソプラノ質の声を待つ少女 ではないらしいが、ゴスロリ少女は見飽きたのであろう黒い厚めの本を片付けながら、一つの本を取り出す。その中は全て白紙だが、その真つ白い紙から、複数の線が現れ一つの地図が現れる。

「それも魔術か？」

「うん。この線はボクがこの街に張った魔力を現しているわけだよ。でも、何もかからないね」

魔術探偵という変わった探偵であるユイヤ・オルコットは、残念そうに本を片付けた。少なくとも、依頼には手を出してくれているわけか。まあ、許してやるか。

「これにかかるまでは行動はできないよ。まあ、それまで待つてくれたら嬉しい」

納得はした。だが、個人的な感想だが、この事務所、全くもって依頼者が来ない。だから、このサイクルの繰り返しは嫌なんだが。

「依頼者はもうそろそろ来ると思うんだけどなー」

このゴスロリ少女は何か予知する力を有しているのだろうか。そ

れとも、前からの約束とかで依頼者が来るのかもしれない。いや、後者が正しいだろうが、こいつの近くにいと最初の可能性もありそうなのだ。……魔術なんてチートもあるしな。

「そうそう、助手。紅茶」

「早っ!？」

渡して3分も経っていないぞ。これまでは10分はかけていたのに。

「ん、すまない。紅茶を入れるのではなく、ティーカップを直してくれ」

こいつ……。まあ、いいか。こういうやつなのはもう解ったことだし。

とりあえず、俺はユイヤの言葉に従いティーカップを水で洗い、棚に直した。意外にも、ティーカップの数が多かった。来客用か？

俺がティーカップを直し終わると同時に、静寂であった部屋に音が流れた。否、音であるがあくまで効果音の部類に入る物だ。

扉。ついさつきまでスキンヘッドが倒れていた扉が開いた。ついでに、スキンヘッドは路地裏に捨ててきた。トンファも没収しておいた。

話を戻す。その扉のところには、おずおずと現れた小動物のような人間。少女が現れたのだ。

「やあ。やっと来たね」

「は、はい! やつと来れました!」

ユイヤの声に少女は喜びに溢れた声をあげる。

「知り合いか?」

まあ、ユイヤはなんだかんだで可愛い姿をしているからな。こういう知り合いがいてもおかしくはない。

所詮友達だろう。そう思っていた俺に対し、このゴスロリ少女は魔術探偵としてこの少女を紹介した。

「彼女の名前はアメル・マミ。ボクの

専属の死神さ」

「し、死神い？」

薄々思っていたが、なんだかこいつと一緒にいると変な単語ばかりが現れるな。ていうか、こんな小さい小動物的な少女が死神とは到底思えないんだが。

「は、ハイ。死神のアマル・マミです。アマルと呼んでください」

と、この小動物少女が言うもんだから、否定するにも否定できない。いや、ユイヤのことだから言い聞かせているのかもしれないが。

「……君、今ボクが失礼なことをしているはずだと思っただろう？」

「え？ いや」

「思った、だろう？」

こいつ……。残念なことに、こいつは中身が男だが外見は女であつて、何とていうか……。カワイイと思つてしまつている自分が悲しい。ていうか、人の心を読めるとか、チートだろ。

「否定はしない」

「まあ、いいけどね。ボクはよくそういうことしていると疑われる。非倫理的だよ、印象で決めるなんて」

疑われるのかよ。なんだか、悲しいな。

「でも、これは本当のことだよ。彼女は死神。証拠が見たいならほら」

ユイヤは先ほどまでいたそのアマルという少女のほうへ指差す。ていうか、人を指で指すなよ。

その心の中でツッコミながらその指の方向へ向くと

「なっ……」

そこには、少女の姿ではなく黒いボロボロのローブを着た何かが

いた。その背中にはその背丈の二倍はあるだろう、それぐらいの大きさの鎌があった。

俺が目の前にいる存在で思い浮かべた単語。そして、さきほどいた少女が言った単語。それが重なる。

「え、えへへ……。驚きましたか？」

黒い何かがそんなことを言う。声はまるでさきほどまでいた少女だった。

俺は即座に脳内会議を始める。ええーっと、とりあえず整理しよう。

- 1、さきほどまで小動物と考えてしまうほど小さい少女がいた。
- 2、その子のことをユイヤは死神と言い、少女もそう言った。
- 3、ユイヤがカワイイと思ってしまった。
- 4、黒い物体が現れた。

……最後から二行目は除いておこう。疲れてるんだ、ティーサイクルで……。

だが、その間のことを考えると非常に短い。俺の考えていた早着替えは無理である。第一、あんな大きな鎌を持てるわけがない。

「認めなよ。この世の中には認めなければならぬ物もあるんだよ」「認めたくないが、流石に認める。死神……というのはいるんだな」「認めたくないものだな。だが、認めないといけないこともある。」

死神かあ……。魔術探偵って、変わった職業。てか生物と交流があるんだな。なんだか、知ってはならない世界を知ってしまった感じがした。

そんな俺を見てユイヤはそのカワイイ顔でドヤ顔。アマルは黒いフードから顔を出す。ユイヤに腹パンしたくなった。しないけど。

あと、今更ながらアマルという少女。もとい死神は意外とカワイイ。ユイヤは中身が男だからか、少しだけボーイッシュというかそんな感じがするが、アマルはすごく少女らしく、なんだかカワイ

イ。あと、アマルの容姿についても説明しておこう。髪型はピンクのツインテール。その顔は幼く、綺麗よりカワイイ印象を受ける。先程まで着ていた服は淡いピンクのワンピースだったが、今は黒いボロボロのローブになっている。そして、その手には大きな鎌なわけだ。危険だなー。ただ、そのせいで怖い印象　もとい少し暗い印象を受ける。

「さて、長たらしい世間話は終了したほうがいいね。これからが、本題だ」

ユイヤが自己紹介というか世間話を終了させた。そして、気持ちを切り替えるように咳払いをする。

「アマル、君の依頼内容はこの間の続き……でいいんだね？」

「はい。そして、もしかしたら終わるかもしれない」

……話が見えん。いや、まあ、俺はここに来てから7時間チョイしか経っていないわけで、解るわけがないんだが。それでも、取り残された感は無くない。

「結城。君は話が見えなくて複雑そうな表情をしているから説明するが、ボクこと魔術探偵は死神と提携して依頼を受けることもある。そして、今回受けた依頼はこの死神のいわゆる手伝いさ」

「手伝い？」

「アマルは悲しいことに未だ下級の死神でね、こうやってボクに頼る。代わりにボクは金や情報や色んなものを報酬として受け取るんだけど」

まあ、このあたりは普通の探偵と似ているな。相手が違うだけか。ていうか、死神の信頼も得ているなんてすごいな、こいつ。

「つーか、俺も依頼の報酬を考えないと」

「その点は君を助手としてタダで雇ったから問題ない。存分にボクを守ってくれ」

その助手という言葉はそんな意味があったのか。全然考えてなかったな。

「仕事内容は、地獄行きが決定している罪人。だが、いかんせん裏

の世界に精通していてね……。残念ながらまだ殺すまでには至ってなかった。ボクは搜索をしていたんだけど、どうやら死神のほうが見つけたようだね」

「それで終わりか？」

「いや、依頼はここから。ボク達も戦闘に同行し、相手を弱らせる。そうじゃないと安心して地獄へ送れないからね。君にも解るだろ、論理的に」

「一見、話の内容がカオスになってきたが、整理して考えてみるとなるほどと思った。」

「どうやら、地獄行きを決定させる鍵は、この死神の少女が握っているらしい。だが、力は強くないため俺たちが敵を弱らせる必要があるわけ、か。」

「了解した。言うなれば、俺とお前で敵をやつつける。そして、アマルでとどめ、ということだな」

「そうだよ。理解が早くて助かる。流石、ボクの助手だよ」
「そりゃどうも。さっき頭を整理していたから偶然早くできたただがな。」

「戦術はもう考えてある」

「と、ユイヤは自信満々でそう言った。」

「どうやら先ほどのティーサイクル中に考えたらしい。」

「先頭はボクで行く」

「待った」

「俺は思わずストップをかける。考えが甘すぎると判断したからだ。お前は今魔術しか使えないんだろ？ なら、俺が先頭でいくべきだ」

「そちらのほうがかくに合理的さ。でも、残念ながら今回の敵の能力等を考えるとその戦法は使えない」

「ユイヤがそう言い切ると、さっきまで黙っていたアマルが俺に説明をする。」

「敵は剣術に長けた、いわゆる盗賊的なやつでして、魔術を知らな

「感じなんです」

「ならなおさらだ。俺が前に出れば」

「君の実力では無理だ」

ユイヤが俺の言葉を遮った。そして冷たく言い放つ。

「表で生きていた人間とでは、裏の人間が明らかに勝る。確かに最初のスキンヘッドも裏の人間だったが、少なくともイレギュラーである君がいたせいか対策を練れずに弱かった。でも、今回は違う。あいては魔術を知らない。いわゆる、そういう物理的干渉しか知らないということだ」

俺はその長たらしい説明と、冷たい声に驚いていた。

「少なくともユイヤはこれまで　　と言っても7時間ぐらいだが、ここまで冷たい声は出さなかった。」

恐怖。それか、それに近い圧迫感。それを感じてしまった。

「故に、ボクが先頭に出て魔術的干渉をし、相手を圧倒する。そこをアマルでとどめを刺す。悪いが、今回はサポートに回ってくれ」

納得……はしていない。だが、確かに合理的だ。

無知ほど危険なものはない。もし俺が敵だったら、いきなりよく知らない魔術攻撃をされたら対応できないだろう。

不服だが、その作戦で行こう。

だが、絶対にこいつは護らないとな。姉さんの依頼の件もあるし。「納得したかい？」

再び優しい温もりを持ったカワイイ声に変わる。

「ああ。なら行くぞ」

覚悟は決めた。決意、というやつだ。そうなれば早く済ませたい。終わらせて、ティーサイクルを始めたい。

俺は最初、嫌悪感を抱いていたであろうあのティーサイクルのことが急に恋しくなってきた。

依頼を受け、戦いの準備をした俺達はすぐさま、敵がいると言われている場所へ来た。場所は町の郊外に位置する森の中。暗闇の中で、フクロウが鳴いているのが聴こえる。

戦闘と言うことで俺はいつもの服に白朱雀を、ユイヤは服を着替えた。といつても、白と黒のゴシックドレスが赤と黒になっただけだが。

それを指摘したら、ユイヤがすかさず、

「一応、戦闘用だよ。血がついても目立たないだろう？ 合理的だよ」

と即答した。理由には何とも言えず返答できなかったが、まあいいだろう。

俺の後ろにはアマルがいる。相変わらずボロボロの黒いローブ姿だ。後ろには大きな鎌を背負っている。その刃が月の光を反射し目立つ。神秘的だが、恐怖を与える。当たらないように気をつけよう。「来ました」

アマルが緊張した声で言う。とっさに俺は刀を引き抜こうとするが、ユイヤが手で制止させる。

「スピード勝負ではなく、まずは向こうの要求を聞くべきだ。場合によれば、戦いをせずに終わらすことも可能だし、合理的だ」

一理あり。接触するなら戦いはしたくないしな。

「交渉能力には自信有りだから、大丈夫だよ」

そしてこのユイヤのドヤ顔である。むかつく。だが、カワイイから殴れないのが悲しい。

「でも、危険なら俺を呼べよ。助けるから」

「君に時間があればね」

いちいちむかつく。だが、アマルが俺を手で思考を止めさせる。よく見ると、眼が真剣そのものになっている。

「ユイヤさん。行ってください」

「解った」

ユイヤも真面目になっている。さっきまでのむかつく態度とは違

う。まるで、あの時言い張った冷たいユイヤだ。

ユイヤが林を越えたところで止まった。俺達は草むらと木に隠れるように、ユイヤの後ろで見守っている。

「何モンだ？」

すると静寂の中からスキンヘッドほどではないが中々に低い声が上がった。よく見ると、そこには髭がボウボウに生えたTHE 盗賊のような感じの男がいた。

「(なあ?)」

「(何ですか?)」

俺はアマルに小さな声で質問をする。

「(なんでこうも盗賊的なやつが続くんだよ)」

「(それを私に言われても……)」

ごもつともである。ていうより、この子はスキンヘッドに会ったことがないから、言っても無駄であることを今更ながら気がついた。「ボクはユイヤ・オルコット。一応探偵をしている。今回は君に交渉をしに来た」

ユイヤが声を上げる。そのかわいらしい声には、今は鉄のように冷たい物を宿している。

「交渉? んなのはいらねえよ。いるのは金と女と命だけだ」

敵の男がいかにも悪党らしいセリフを吐く。こいつ、最低な野郎だ。

俺はすぐに斬りたい衝動を抑えながら、ユイヤを見る。未だに冷静に敵を見ている。恐怖はなさそうだ。

「そうか。なら、交渉は終了だ」

交渉が終わった。ていうか、早っ! 得意とかそういうやつじゃないぞ。ていうか、下手だ。自信過剰だ。

「ケツ。そうかい。まあ、いい。おめえ、よく見たらいい女じゃねえーか」

……予想通りの展開だ。いや、まあカワイイけどさ。でも、中身は男なんだぜ。

「そりゃどうも。でも、ボクには聞きたくない言葉だ」
少し怒っているのが判る。禁句なのかもしれないな。思わず身震いをしてしまう。

「女のくせに生意気言いやがって。んじゃ、力づくで行かせてもらおうか」

これまた予想通りの展開だ。

俺はとっさに刀を抜こうとした。が、それをアマルに止められる。
「（ユイヤさんに言われていたんですけど……。この戦いには、あなたに干渉してほしくないそうなんです）」

「（なんでだよ）」

「（力を見せ付けておきたい、と言っていました）」

うーん……。納得はいかないが、ユイヤが不適に微笑んだから、無理矢理納得させた。大丈夫だろう、と思い込ませる。

「俺の女になりやが」

「闇式、紐牢！」

ユイヤが敵の言葉を遮り大声で言葉を放つ。すると、地面から
厳密には地面にある林などの影から複数の黒い紐のような物が現れ、敵の体に巻きついた。

「な、なんじゃごりゃ!？」

敵はいきなりの現象に戸惑い上ずった声を出す。

「魔術。しかも、ボクの得意な闇系統のね」

そう言いながら、ユイヤは敵に近づく。武器は持っていない。しかし、謎の安心感がある。

これが魔術か。そう感じた。

「決着は早めにつけたいんだ。だから、」

と最後まで言い終わらずに、

「炎式、灯火！」

と言つて、ユイヤはその小さい指を敵に当てる。そこから炎が現れ、敵を燃やした。全て。口も。目も。髭も。髪も。全て。

敵は声にならない声を上げててもがき苦しんでいた。

残酷だ。残酷すぎる。度が過ぎている。

「アマル」

ユイヤは冷静に俺の隣にいる少女の名を呼ぶ。少女はハイイ、と浮かれた声を出しながら草むらから出る。その手には、あの大きな鎌。

「んじゃ、あなたは地獄行きなので、もっともっと熱い思いをしてきてくださいね。さようなら」

無邪気で、尚且つ心が浮かれている声を出しながら、その大きな鎌で火だるま状態の敵を切り裂いた。すると、不思議なことにその火だるまから声は出なくなり、次第にその形すらなくなった。

「依頼終了だよ」

ユイヤが冷たく言う。またこの声だ。

俺はこの声が好きにはなれなさそうだ。まるで感情を押し殺したような声で

いや、押し殺しているのかもしれない。冷たい仮面を被っているに違いない。

「結城。帰ろう」

ユイヤはそう冷たい声で言う。

ユイヤは純粹に恐怖し、人を殺した罪に悲しんでいるのかもしれない。そう思えた。そう思いたかった。いや、そうとしか思えなかった。

なぜなら、彼女の目から涙が浮かんでいたから。

俺は言われたとおりに彼女の隣に行った。

「帰るか」

俺は、そんなユイヤの手を握り締めながらそう言った。

不思議と、その手はとても熱かった。

第二話 死神と魔術のストラテジー（後書き）

人は自分という仮面を被ります。

しかし、その仮面は一つではなく複数持っています。

人は外部の環境によって仮面を変えるのです

例え悲しいことがあっても顔に出さない人は、実はそうやって隠しているだけなのかもしれません。

そう考えると、人間って悲しく思えてきませんか？

第三話 剣越と白朱雀のポッシビリティ

「鍛冶屋に行こう！」

「はあ？」

今日の開口一番の言葉がそれだった。『おはよう』ではなく『鍛冶屋に行こう』である。ユイヤ、マナーがなっていないぞ。一応、日本の文化なんだから。

「暇だから！ だから、鍛冶屋に行こう！」

「いや、暇だが」

ここに来てから一週間が経つが、最初の日以外に依頼という依頼は来なかった。

金的な意味では充実しているらしいが、この、何と云うかニート的な数日は酷かった。ティーサイクルを繰り返し、暇があれば剣術練習をしたりしていたのだ。まあ、ニートとは違うが、仕事をしていないのは事実だよな。まあ、俺は高校生だから少し違うんだが。

「唐突過ぎるだろ！ もう少し、何ていうか……順序はないのか、順序は！」

「ん？ カレンダーには書いてあるんだけど？」

と、ユイヤ専用の机の上から色々書かれたカレンダーを素早く取り出した。

いや、まあ、書いてあるけどよ。見ねえよ。つーか、ハートマークで囲うなよ。女子か！ いや、体は女子か……、だが、中身は男だろ。

と、我ながら馬鹿らしい脳内会議をする。

「第一、鞘がないと危険だろう？ 非論理的だよ」

「まあな」

黒い袋じゃ、いつか切り裂かれて中身が出てしまっしな。なんだかんだで、姉さんも鞘を持ってたな。黒いやつ。

「金は、かかるのか？」

「コネで何とかするよ」

酷い。これは酷いぞ。

こいつの人望が厚いのは、この間アマルに嫌なほどに聞かされたでも、そういう意味で信頼を勝ち取っているなら、俺は殴るぞ。ゲンコツ一発の刑だ。

と、俺がわなわなと拳を震わせていたところで、ユイヤはいきなり懐かしむような顔で遠くを見た。

「信頼は全てを繋げるもの。それがあるから、自分は世界に存在できる」

唐突にそうつぶやいた。

「ボクの知り合いの言葉だよ。いや、名言といつかな」

「誰だ、そんないい言葉を作ったのは？」

一瞬、中二病的なものを感じたが、よく考えてみるとそれはとても深い意味を持っているのが解った。

「ナギサ。風見鶏ナギサという変人だよ」

「ナギサ……。つか、変人と言うなよ」

知り合いならそういう扱いすんなよ。

ていうか、ナギサか。名前的には女なんだろうか？ こいつの知り合いだから、また死神とかそういう部類な気がする。まあ、もう驚かないがな。

「というわけで行こう！」

「何が“というわけ”だ。……まあ、行くか」

俺にとっては何も利益がないわけではない。むしろ、鞘が手に入るのだ。得だ、得。メリツトだ。

俺はそう思い、急いで刀を取りに行く。心なしか、ユイヤのテンションが上がっているように見えた。

ユイヤの魔術探偵事務所から出て徒歩8分。そこから電車に乗っ

て16分。そして再び徒歩で16分を費やし、計40分を使用し、目的地に着いた。

場所はまさに山の中。周りは木だらけ。マイナスイオンがすごい。俺達はその山にある長々しい階段に登りながら雑談を繰り返す。

「この山は近衛山と言われている、ボク達が会いに行こうと思っ
ている人間の祖先、近衛信三の所有していた山さ。天性の鍛冶屋と言
われていたらしいよ」

ユイヤが得意げになって説明するが、正直な話よく解らん。
整理はしないでおこう。興味が湧かないし。

「ユイヤ」

ふと、俺は突然浮かび上がった疑問を口にする。

ユイヤは、話を遮られたことに一瞬だが、ムカついた顔をしたが
すぐに寛容的な顔になる。

「なんだい？ 結城」

「いまいちよく判んねえんだが、なんでユイヤの知り合いに鍛冶屋
がいるんだ？」

この俺の質問に、ユイヤは人差し指を上に向けて説明する。

「ボクは昔は剣士だったんだよ。君と同じ感じのね。んでさ、鍛冶
屋の協力が必要になって、いろんな人に聞いてここに辿り着いたん
だよ」

そう言って、ユイヤはその人差し指をとある物に指す。

そこには、木造というか、THE 道場って感じの神祕的なノリ
の建築物があった。神祕性を感じるが、ここが鍛冶屋だと言っなら
そうは思わないだろう。

「ホホー！ いるかい？」

ユイヤがその可愛い声でそのホホという存在を呼ぶ。が、反
応はなし。聞こえるのはウグイスの、ホーツホケキヨ、という泣き
声だけだ。

カラスでなくてよかったな。

「いないのかな？ それとも寝てるのか」

「アポなしかよ」

アポありだと思っていたんだが。いや、まあ、こいつの性格なら後先考えずにしそつだがな。

「ホーホオー！」

ユイヤがもう一度大きな声で呼ぶ。

すると、ウグイスの泣き声が止み、代わりにその木造建築物からドタドタ、と激しい音が聞こえる。しかも、その音が近づいてくる！

「あつ、き

「ユウーイヤアー！！！！」

突然、その建築物の扉らしきものが勢いよく開かれ、そこから黒い影が奇声とともにユイヤに抱きついた。俺はとっさに、背中につけていた黒い袋から刀を抜く。

が、倒れそうなユイヤが両手でバツマークを作る。いちいちカワイイな、おい。

「ユイヤ、そいつは誰だ？」

俺は握っていた刀を袋に直し、そう問いかける。

今更ながらだが、その影の姿は人間であり、俺より歳が上のような外見だった。そして、女である。

「か、彼女の名は近衛穂々。この山の持ち主であり、鍛冶屋であり、まあ……こういう女だ」

最後のこつというは、すごく複雑そうな顔をして言った。まあ、嫌われてはいないがくっつきすぎ感は否めないからな。つか、ユイヤを頼ずりしてるし。

「こら、ホホ。止めなよ」

約16歳で尚且つ小さめの少女に怒られる推定20歳ぐらいの女性の画。色んな意味でシニールだ。

そして、今更ながら巨乳と気づく。悲しいな、男としては複雑な気分だ。つか、残念ながら大きすぎるのは苦手なんだがな。

そつ変な脳内整理をしていると流石に諦めたようで、ユイヤを離す。

「……………」

そして、今更ながら俺を発見したようでなぜか睨んでくる。

「お前、誰だ！」

「気づくのが遅すぎねえか？」

ツッコみ辛いな、こういう人は。つか、関西人の血は入ってないから自信がないんだよ、ツッコミは。まあ、東京をなめてるわけではないんだがな。

「名を名乗っとく。羽馬結城。剣越者第八位だ」

「羽馬の息子か」

と、ユイヤの頭をなでた後その凜とした目で俺を見る。すると、いきなり俺の刀が入った袋を取り上げる。

「あっ」

「ふん、鞘なしか。だが、手入れは行き届いている……。錆もないな」

勝手に言葉を並べながら俺の刀を振ったり色々し始める。

「大事に使っているな。だが、鞘はあるだろ。作ってやる。あと、鍛えてやる」

「さすがホホ。頼れるな」

ホホはフフツ、と微笑んだ後、その木造建築物の中に入っていた。

俺は唾然としていた。つか、展開が速い。解らん。速すぎて解らん。思考が追いつかん。混濁してる。情報の渋滞を起こしている。

そんな俺をユイヤは手を握り、

「彼女は鍛冶屋で、初代からずっと剣越者の刀を鍛えているんだよ」
そうつぶやいた。少しずつだが情報が整理されていって、現在状況をつかむ。

ていうか俺、頭が悪いからいろんなことがあるとパニくるからな。そういうところは直していかないとな。

「見に行くかい？」

ユイヤは穏やかに、優しくそう聞いてきた。あのとときの冷たい声

は微塵もない。

「ああ」

俺は短く、そう答えた。

「この刀の名は？」

「白朱雀」

「誰に渡された？」

「親父」

そんな会話をしつつ、剣を鍛えるホホはなんとというか美しく、凛々しくて、すっごく頼れる姉さんタイプな人だった。

と、普通の人間ならそう言う。いや、俺も普通な人間だが、俺はむしろその手際に目が行っていた。早い、というか綺麗だ。刀が整えられていくような気がする。

「ユイヤ。この刀、ダイヤモンドだよ」

「やっぱり」

「はあ？」

ダイヤモンド？ よく解らん単語が出てきたぞ。

「君は本当に無知だね。剣越者にはそれぞれ専用の刀を持たせられる。君の場合の白朱雀だよ。そして、その刀の刃には鉄以外に特別な成分が入っている。君の場合は、それがダイヤモンドなのさ」

ダイヤモンドは確か、宝石の一種だったはずだ。地球上で一番硬いやつなんだよな。確か、ダイヤモンドカッターというやつもあったはずだ。

「恐らくだけど、その刀の特性『魔力を斬る』はそこから来ている。石言葉は確か、『純潔 不屈 永遠の絆』だったはずだから」

「最初と最後はよく解らんが、不屈なら納得だな。魔力にも屈しない剣か。やっぱいいいな」

カッコイイし、なんかいい。不屈かあ……。

「ていうか、ユイヤ」

「ホホ。ちよつと耳貸して」

と、ユイヤがゴニョゴニョと、ホホに近づいて耳に何かをささやく。ていうか、ホホ、ユイヤに抱きつこうとするな。

「解った」

ホホが短くそう言った。なんだか、隠し事をされているみたいで嫌だな。でも、誰だつてあるもんな。だから、責めるのは止めよう。

「羽馬結城。君はまだ白朱雀の可能性に気づいていない」

「可能性？」

ホホが俺を見ずに刀をハンマーで叩きながらそう言う。相変わらず凜々しく、その言葉には力と迫力がある。

「剣越者と認められた人間には、少し変わった能力がある。剣越者は剣士を超えた存在。剣に純粹になれる人間を指すんだよ。そして、その存在は剣を知ることができる」

「剣を…知る？」

「……鍛冶屋の人間だから言えることだが、剣には少なくとも意思に近いものが存在する。その意思を感じ取れるようになれば、君は白朱雀と共に新しい領域に行ける」

……全てが初耳だった。俺はあくまで肩書きだけのものだと思っていた。でも、内容が凄すぎた。

「新しい領域を知りたいなら、今後特訓の仕方を変えな。やり方はユイヤが知ってる」

ユイヤ、がが。

今の俺は純粹にその新しい領域を目指したかった。ゆえに、俺はその秘密を知っているであろうユイヤに視線を送る。

ユイヤは微笑む。

「元より、ボクは君に力を知ってほしい。そして、一緒に戦ってほしいんだ。今のボクには戦う力がないからね」

魔術はどうした、魔術は。と、口からは出なかった。

「ボクのために、一緒に着いてきてもらえるかい？ 結城」

ユイヤはそう言つて、手を差し伸べてきた。
答えは一つだった。

「……ああ」

それはもちろんであった。俺はお前を守る。戦つてやるよ。
だから、俺は力を求めてやる。ユイヤを護るため。剣越者として
更なる領域に立つため。そして、姉を見つけるために。

俺は新しい決意を胸に、ユイヤの手を包み込んだ。

帰り道、俺は新しく作ってもらった白を基調とした鞘と、削れた
刃部分を使つてついでに作ってもらったナイフをマジマジと見つめ
ていた。どっちも俺の好みだ。

「このナイフの名前は……『白弱朱雀』だな」

「漢字、間違っている気がするけどね」

解っているよ。薄弱だろ。でも、こういう名前しか思いつかねえ
んだよ。

俺は鞘をとりあえず黒い袋に直し、白弱朱雀を懐にしまう。

「帰つたら特訓だな」

「その前に紅茶だよ」

へいへい。了解しましたよー。

と、俺は電車に乗るためにプラットフォームでゆっくりしていると、
「あつー！」

ユイヤが大声を出した。周りには他の客がいなかったので、その
声が空しく響く。

「どうした？」

「いけない、忘れてた！」

俺はユイヤの方を向きながら頭の上に？マークを浮かべる。忘れ
もんでしたか。

だが、ユイヤは俺を見て、すごく悲しいような顔をしながらこう

言ったのだった。

「アマルの契約が切れるの、あと二日だ……」

第三話 剣越と白朱雀のポッシビリティ（後書き）

人には、可能性という特別な力があります。

力があっても発揮できない者や、しようとしても動けない者を指します。

ただ、その人間には希望があります。出来るのです。

だから、希望を諦めずに可能性に賭けてみるのはどうでしょうか？
そう考えると、人間ってすごいと思いませんか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7448y/>

ゴシック・ロジック

2011年12月8日00時49分発行